

三重県多気郡明和町
齋宮跡埋蔵文化財調査報告 6

史跡 齋宮跡

昭和63年度現状変更緊急発掘調査報告

平成元年 3月

明 和 町
三重県齋宮跡調査事務所

序

昭和54年3月27日に国史跡に指定されてから10年が経過いたしました。この間、地元の方々のご協力により公有化面積も17.7haとなり、発掘調査も13.7ha実施することができました。又、地元の方々を中心に、しょうぶの咲く6月には史跡公園齋宮跡をメイン会場として盛大に「齋王まつり」が催され、中でも王朝絵巻を再現するような齋王群行がおこなわれるようになりました。

町民が長年念願しておりました齋宮歴史博物館も本体工事が完了し、10月オープンを目指して周辺の整備も、県・町が一体となって着実にすすめております。また町といたしましても遺跡の整備・保存と観光が一体的に推進していけるよう「齋宮跡管理法」を早急につくり、齋宮跡の保存・活用と文化の振興を図っていくことを考えております。

さて、このように齋宮跡の保護・保存・活用が進む一方、140haに及ぶ広大な史跡内に600世帯もの住民が生活をしている特殊性から、昭和63年度は、46件の現状変更等許可申請が提出されました。

この報告書は、その中で事前調査が必要であった17件のうち調査が終了した15件についての結果をまとめたものであります。これらは小規模なものがほとんどであります。齋宮跡の究明に貴重な資料を提供してくれるもので、これらの成果の積み重ねにより、齋宮跡の姿がより明確になることを期待するものであります。

最後に、発掘調査にご協力いただきました地元の方々や、発掘調査及び報告書の作成にご協力いただいた三重県齋宮跡調査事務所並びに関係各位に対して深甚の謝意を表する次第であります。

平成元年3月

明和町長 辻 英 輔

例 言

1. 本書は明和町が昭和63年度に実施した史跡齋宮跡の現状変更緊急調査の結果をまとめたものである。尚、第76-2・4・5・6・13・14次の発掘調査は、国庫及び県費の補助金の交付を受けて実施したものである。
2. 調査は明和町が調査主体となり、三重県齋宮跡調査事務所及び明和町齋宮跡保存対策室が担当した。
3. 発掘調査・整理および本書の作成には、三重県齋宮跡調査事務所の中林昭一、山沢義貴、田阪 仁、泉 雄二、上村安生及び明和町齋宮跡保存対策室 中野敦夫があたり、奥野 実、坂真弓美、上田真登、松田早苗、中桐真紀、白木英敏がこれに協力した。
4. 遺構実測図、遺構表示等は、すべて三重県齋宮跡調査事務所刊行の調査概報に準じている。

目 次

1. 前 言	1
2. 第76-2次調査	2
3. 第76-3次調査	3
4. 第76-4次調査	7
5. 第76-5次調査	7
6. 第76-6次調査	8
7. 第76-7次調査	10
8. 第76-8次調査	11
9. 第76-9次調査	12
10. 第76-10次調査	13
11. 第76-11次調査	14
12. 第76-12次調査	17
13. 第76-13次調査	18
14. 第76-14次調査	20
15. 第76-16次調査	20
16. 第76-17次調査	21

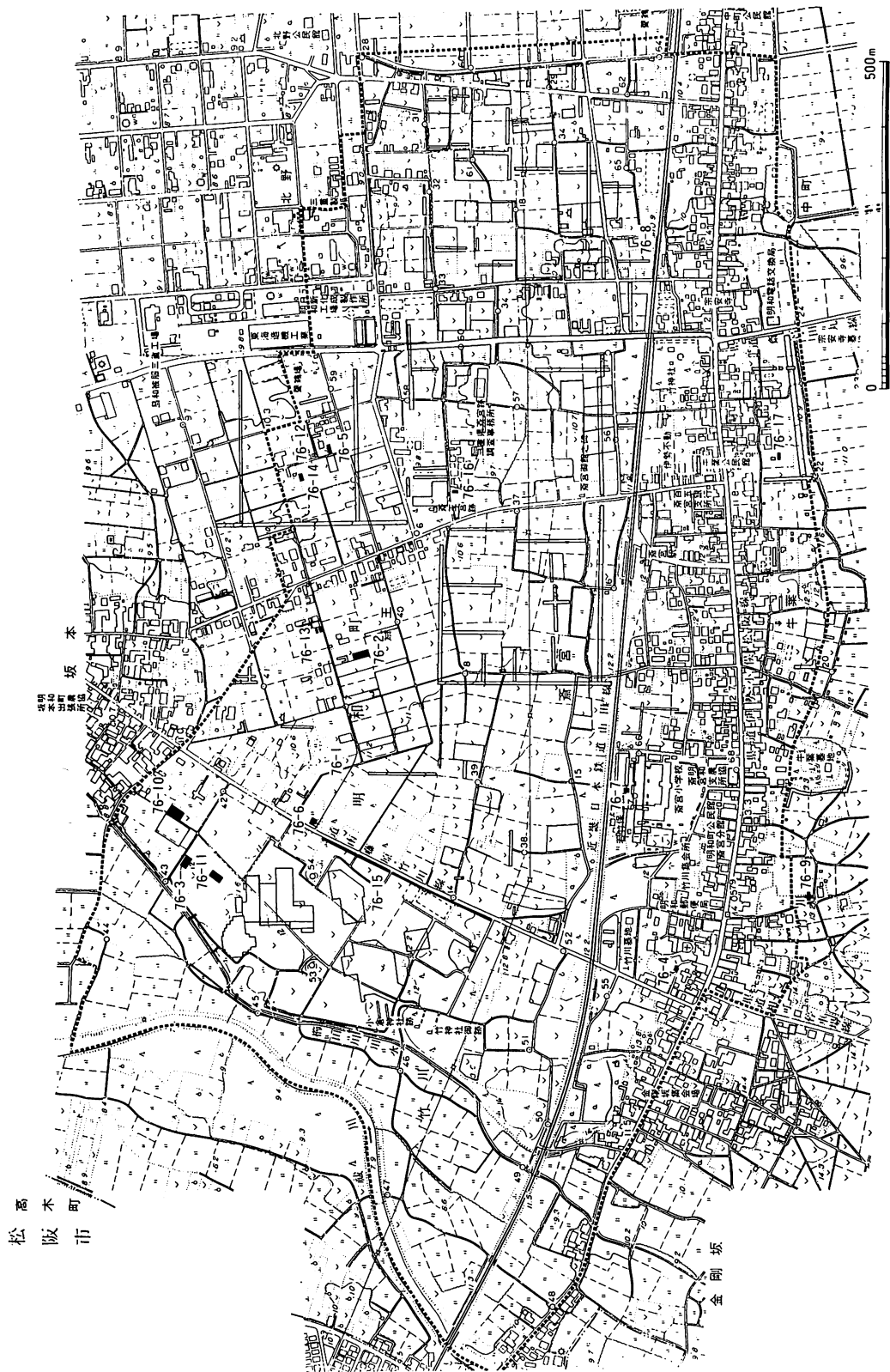


fig.1 発掘調査箇所位置図 (1 : 1000)

1. 前 言

今年度の現状変更に関する許可申請は、個人住宅に関するもの25件、史跡内住民の生活環境に伴うもの8件、齋宮歴史博物館を中心とした周辺整備に伴うもの8件、その他5件の合計46件が提出された。このうち事前に発掘調査が必要であったのは、前年度から調査中であった2件を含めて17件である。調査面積は、8,820㎡に及んだが個人住宅に伴うものは1,169㎡で、残りの7,651㎡は生活環境整備、博物館周辺整備等の公共事業や小規模開発に伴うものであった。

調査場所は、宮域北部の齋宮歴史博物館周辺および進入道路に沿った古里・塚山・篠林・楽殿地区において12件と集中している。保存管理計画の土地利用区分で見ると第1種保存地区1件、第3種保存地区14件、第4種保存地区1件、史跡と接する地区1件である。尚、第1種保存地区の現状変更は、史跡公園内での便益施設の設置に伴うものであり、第4種保存地区は、齋宮小学校の施設整備に伴うものである。

このうち調査の集中した宮域北部では、宮域北部を東西に横断する博物館進入道路（第76-1次調査）を挟んで東から第76-6次、第76-2次、第76-13次、第76-14次、第76-12次、第76-5次調査がおこなわれた。塚山地区北西部（第76-6次調査）では、古墳の痕跡である周溝および土塚墓が検出され、塚山地区東部から篠林地区中央部にかけて（第76-13次調査）は、奈良時代になんらかの施設があったと想定させる総柱建物や竪穴住居などの遺構が多く検出され、奈良時代の齋宮を考える重要な地域と考えられる。

また、第76-17次調査がおこなわれた宮域中央部南端の鈴池地区では、平安時代前期の大型掘立柱建物が想定される柱穴が確認され、昨年（第70-3次調査）においても同様の建物が検出されており、史跡南端の木葉山・鈴池・牛葉地区には平安時代前期の遺構が広がっていることが考えられ、今後注目される地域であろう。

年 度	現 状 変 更 申 請 数	発 掘 調 査 件 数	調 査 面 積(m)	補 助 金 事 業 調 査 件 数	補 助 金 事 業 調 査 面 積(m)
54	33	17	3,968	12	996
55	60	12	1,281	10	815
56	53	12	5,416	10	696
57	50	8	657	7	577
58	52	16	3,757	10	1,440
59	30	15	2,884	12	1,589
60	39	8	1,260	5	1,014
61	54	12	1,845	9	1,507
62	57	16	2,854	13	1,620
63	46	17	8,820	7	1,131

2. 第76-2次調査(6A D E-F・G)

地番 多気郡明和町大字齋宮字篠林3158・3159番地
原因 個人住宅の新築
調査主体 明和町
調査担当 三重県齋宮跡調査事務所
調査期間 昭和63年4月11日～5月9日
調査面積 300㎡

1) はじめに

当申請者は博物館進入路予定地内に生活しており、当申請地は、その移転先としての個人住宅新築予定地である。第70-12次調査では宅地造成にともなう擁壁部分の調査を行った。それに続く面的な調査である。

申請地は史跡中央部の篠林地区の中央西部に位置し、東西14.5m、南北21mの調査区で約300㎡について調査を行った。これまで当地域周辺では幾度かの調査が実施されている。西に接する畑では昭和55年度に第33次調査が、また、第33次調査の西に接する畑では、第64-12次調査が実施されている。これらの調査で検出された遺構には、奈良時代と平安時代の遺構が主に検出されている。また、篠林地区の西北部では昭和61年度に第64-3次調査が実施され、奈良時代の総柱建物3棟が検出されている。このように当地域周辺には奈良時代を中心とする遺構が広がっていることが判明している。

2) 調査概要

遺構面までの深さは0.4mである。検出した遺構には、平安時代前期の土壇S K 5451・溝S D 5460、平安時代末期の土壇S K 5459・5463～5465、鎌倉時代前半の土壇S K 5452・5454・5455～5458・5461・5462、溝S D 5450、鎌倉時代後半の溝S D 5453がある。柱穴も検出されたが、掘立柱建物としてまとまるものはない。

鎌倉時代前半の遺構からはいずれも土師器皿・鍋、山茶碗が出土しており、特に、溝S D 5450の北東隅では、刀子が2つ出土している。1つは、半分に折れているが完全に残っており、木質も比較的良く残っている。

出土した遺物は、整理箱で17箱あり、特殊な遺物としては、緑釉陶器3点、墨書土器2点、瓦1点がある。

周辺には奈良時代を中心とする遺構が広がっているが、今回は奈良時代の遺物も少なく、遺構は鎌倉時代を中心とするものであった。

76-2次

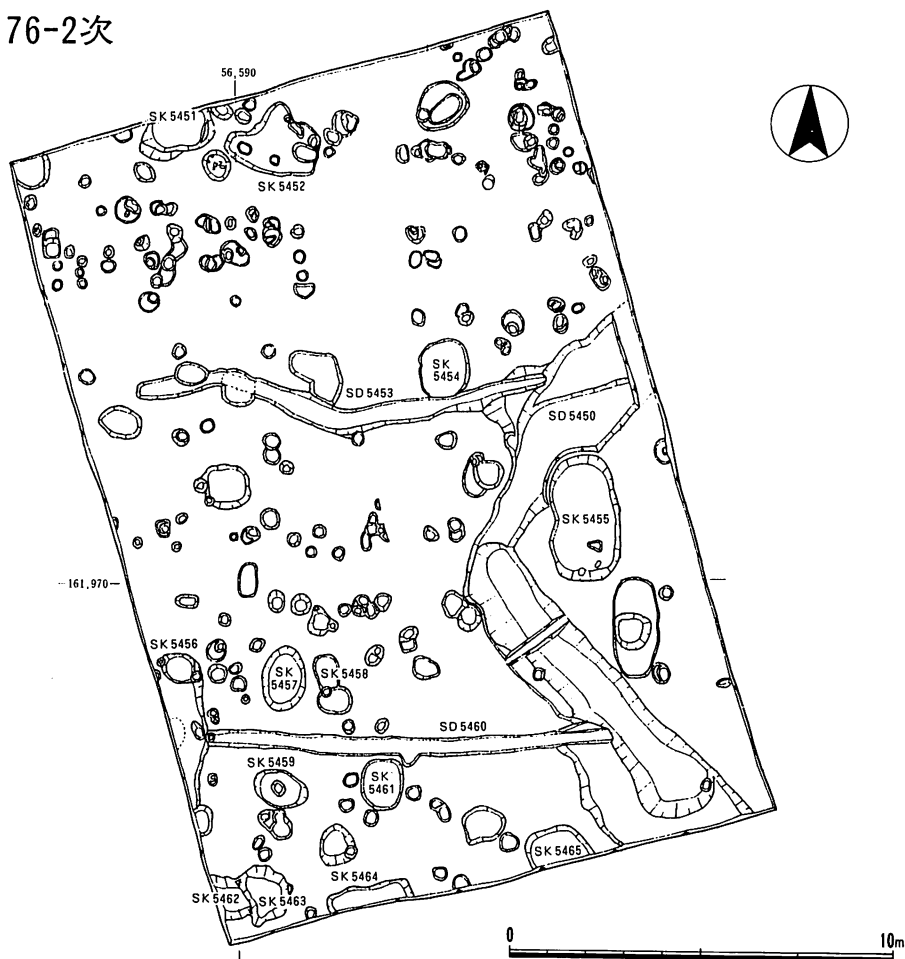


fig. 2 遺構実測図 (1 : 200)

3. 第76-3次調査 (6 A B E)

地番	多気郡明和町大字竹川字古里554~558、565~568番地
原因	古里地区整備 排水路新設
調査主体	明和町
調査担当	明和町斎宮跡保存対策室
調査期間	昭和63年4月19日~5月28日
調査面積	434m ²

1) はじめに

当該現状変更は、博物館および周辺整備に伴う排水路新設工事である。その位置は、古里地区北部を東西に走る農道部分を通り、更に台地周縁部を台地と祓川が狭まる位置まで南に行くものである。そのため農道部分の下については幅3m、長さ94mのトレンチを、台地周縁部については3ヶ所トレンチを入れ様子を探ることにした。なお、北から第1トレンチ、第2～4トレンチとした。

2) 調査概要

第1トレンチ 遺構面までの深さは西端で0.6m、中央部から東に向かって徐々に深くなり東端では0.9mである。検出した遺構には飛鳥時代の竪穴住居2・掘立柱建物1、奈良時代の竪穴住居5・掘立柱建物3・土壇2、平安時代末期から鎌倉時代の溝3がある。

弥生時代の遺構には方形周溝S X 5470・5471が重複する位置で検出されS X 5470が東西溝、S X 5471が南北溝で重複関係はS X 5470のほうが新しい。なお、S X 5470からは弥生時代中期の口縁部を欠き、体部下半の穿孔された壺が一個体出土した。

飛鳥時代の竪穴住居S B 5472・5480は調査区中央部にあり、どちらも南半分が検出されたもので、S B 5472は東西4.9m、深さ0.4mの規模で、幅0.3m、深さ0.1mの周溝が巡る。また、径0.4m、深さ0.4mの柱穴を伴う。S B 5480は東西4m以上、深さ0.4m。出土した遺物はS B 5472が整理箱で3箱、S B 5480は1箱である。出土した遺物から7世紀後半の遺構と思われる。掘立柱建物S B 5481はS B 5480と重複しS B 5480より古い。出土した遺物がほとんどないがほぼ同時期としておく。

奈良時代の遺構には竪穴住居S B 5469・5475・5483～5485、掘立柱建物S B 5468・5473・5477、土壇S K 5474・5476がある。このうち掘立柱建物は、柱掘形から出土する遺物が少なく時期は限定できないが、奈良時代のものと考えられる。S B 5468は東西3間分検出した。柱間が短いので3間×3間の総柱建物と思われる。他の掘立柱建物は規模の判明するものはないが、柱掘形は0.5～0.7mの方形を呈している。

平安時代末期～鎌倉時代の溝にはS D 5478・5479・5486がある。S D 5478・5486は幅1.2～1.4m、深さ0.4mの比較的規模の大きなものであるが、遺構検出面は東が深いため溝底の海拔高はS D 5478は10m、S D 5486は9.6mである。

第2～4トレンチ 台地周縁部の調査は、台地上端から下端までの斜面部分の遺構の残存状況を探ることに主眼をおいた。斜面部分では遺構は検出されず、現在の台地上端部から東に2～3m入った所から地山がなだらかに落ちていることが確認された。また、台地下端には櫛田川用水が流れており、その時の掘削による掘形が検出されている。第4トレンチは平坦な所に位置する。この平坦な部分は、調査の結果、櫛田川用水の工事の盛土であることが判明した。

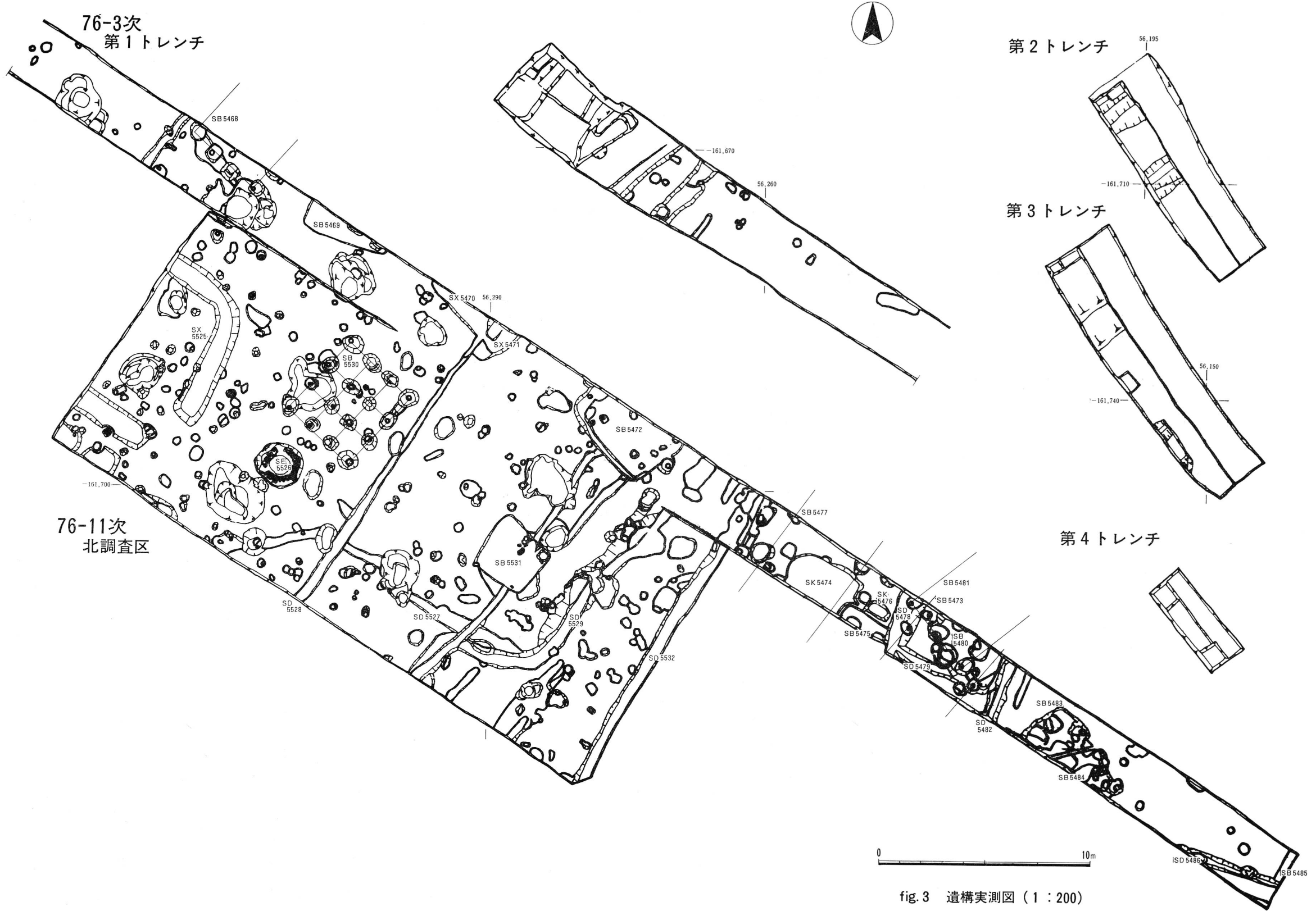


fig. 3 遺構実測図 (1 : 200)

4. 第76-4次調査(6ACK)

地番 多気郡明和町大字竹川字東裏354-13番地
原因 個人住宅の新築
調査主体 明和町
調査担当 三重県齋宮跡調査事務所
調査期間 昭和63年7月4日～7月6日
調査面積 18m²

1) はじめに

申請地は、史跡西南部にあり、竹川墓地の南70mの住宅地に囲まれた地域である。調査は東西6m、南北3mの調査区を設定し、18m²について行った。

2) 調査概要

遺構面までの深さは約0.3mであり、検出した遺構は、奈良時代の竪穴住居2、土坑1がある。トレンチのほぼ中央に攪乱があり、遺構の前後関係は確認できなかった。SB5490は攪乱の東で検出したもので、幅0.2～0.3m、深さ0.05m程の周溝を検出した。SB5489は攪乱の西で検出したもので、周溝、支柱穴等は確認されなかった。出土遺物は、いずれも土師器、須恵器の細片が少量で遺構の時期の判断はむずかしいが、奈良時代のものと考えられる。土坑SK5491は竪穴住居SB5490より古いものであるが、遺物はほとんど出土しなかった。

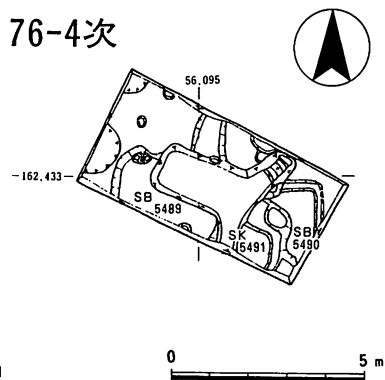


fig.4 遺構実測図(1:200)

5. 第76-5次調査(6AEE-W)

地番 多気郡明和町大字齋宮字楽殿2891-2番地
原因 個人住宅の新築
調査主体 明和町
調査担当 三重県齋宮跡調査事務所
調査期間 昭和63年7月4日～7月6日
調査面積 20m²

1) はじめに

申請地は、史跡中央北部の楽殿地区の北寄り76-5次に位置し、昭和62年度の第70-2次調査が東で、また、西でも第70-7次調査が実施され、奈良時代を中心とした遺構が検出されている。調査区は東西10m、南北2mのトレンチを設定した。なお、周辺の調査から遺構面まで深いことが判明しているため、重機を使用して調査に入った。

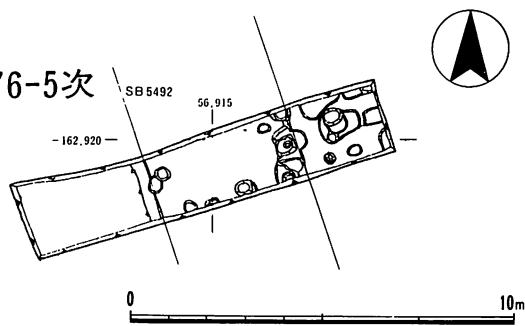


fig.5 遺構実測図(1:200)

2) 調査概要

遺構面までの深さは約0.6mであり、検出した遺構は奈良時代の竪穴住居1がある。他に柱穴もいくつか検出したが、建物としてまとまるものはなかった。また、道路際には攪乱があり、完掘はしていない。

奈良時代の竪穴住居SB5492は、東西4m、南北は両側とも調査区外に延びる。深さは0.3m、東辺中央部にはカマドが作られている。カマドの南には貯蔵穴があり、その中から完形の土師器杯3点が出土している。遺物は奈良時代前期の遺物が整理箱で1箱出土している。

出土した遺物は整理箱で2箱あり、特殊な遺物には緑釉陶器が2点出土している。

6. 第76-6次調査(6ACB-A)

地番 多気郡明和町大字齋宮字塚山3276-1・13番地

原因 個人住宅の新築

調査主体 明和町

調査担当 明和町齋宮跡保存対策室

調査期間 昭和63年7月25日～8月29日

調査面積 300㎡

1) はじめに

調査地は県道南藤原・竹川線に接し、第76-1次調査の北側にあり、東西20m、南北15mの調査区を設定し300㎡の調査を実施した。

2) 調査概要

検出した遺構には、古墳時代の周溝SX5500、奈良時代の土坑墓SX5499・5498、土坑SK

5493、平安時代の井戸 S E 5496、鎌倉時代の溝 S D 5494・5495・5497がある。

古墳時代の周溝 S X 5500は方墳の周溝であり、南の第76-1次調査でも検出されており、東西14m、南北15mの規模であることが判明した。

奈良時代の土塚墓 S X 5499・5498は S X 5500の周溝内で検出したもので、S X 5499は東西0.8m、南北1.1m、深さ0.2mで、壁面は赤く焼け底には炭が検出されている。S X 5498は掘形等は周溝埋土内であったため確認できなかったが、土師器の甕が1個体据えられており、中から人骨が出土した。人骨は細片になっており火葬された後埋葬されたものと思われる。未鑑定であるが、顎の骨の一部も出土した。

平安時代の井戸 S E 5496は直径4mで1.2mまで下げたが完掘はしていない。出土した遺物は少ないが、平安時代前期の遺構と考えられる。

出土した遺物は整理箱で8箱ある。

76-6次

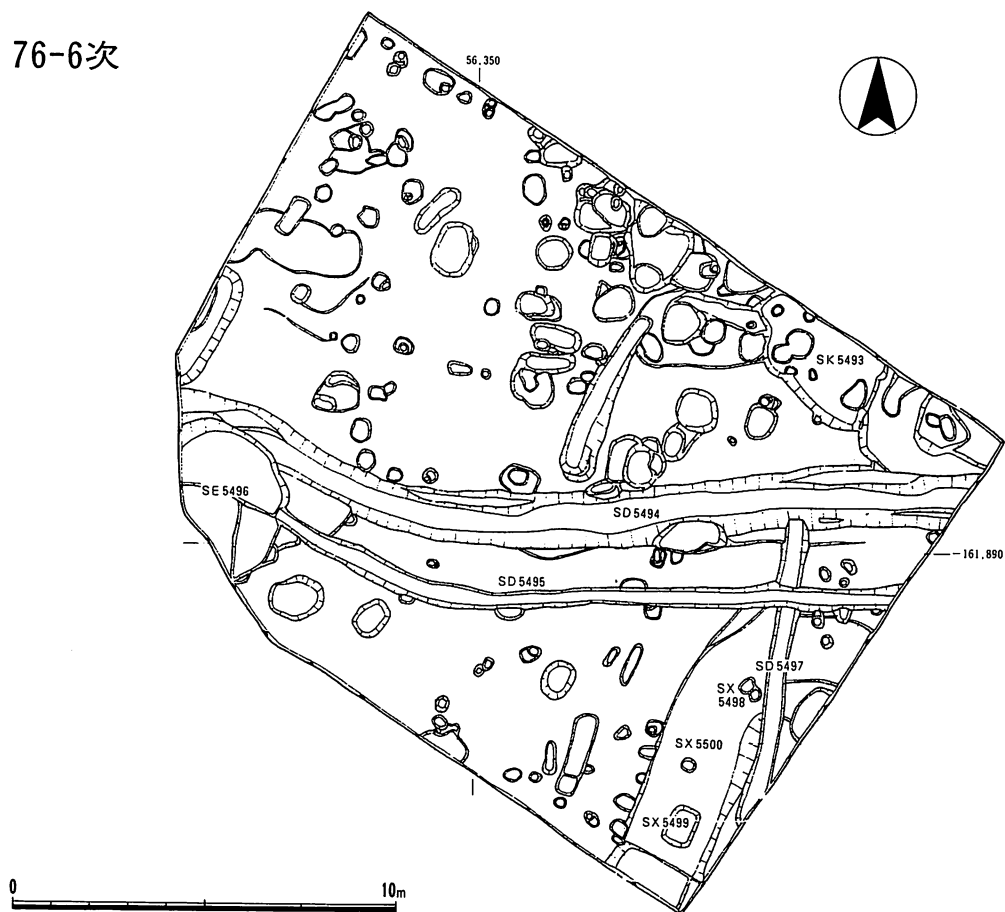


fig. 6 遺構実測図 (1 : 200)

7. 第76-7次調査 (6 A C M-M)

地 番 多気郡明和町大字斎宮字広頭3385-2番地
原 因 斎宮小学校給食室移転改築
調査主体 明和町
調査担当 三重県斎宮跡調査事務所
調査期間 昭和63年8月22日～9月9日
調査面積 185㎡

1) はじめに

申請地は斎宮小学校敷地の中央北部に位置する。これまで斎宮小学校では校舎・体育館・プールの建設などによって事前の調査(第15次・第48-1次・第48-13次・第53-1次・第53-14次・第58-3次・第64-5次・第64-11次調査)が実施され、奈良時代～室町時代までの遺構が検出されている。なかでも第15次調査では平安時代後期の四脚門が斎宮において初めて検出されている。今回の調査はこの第15次調査の北側、第48-1次調査の西に接する位置で、東西13m、南北15mの調査区を設定し、185㎡の調査を実施した。

なお、周辺の調査結果から遺構面が深いことが判明しているため、重機で表土を除去したのち遺構検出を行った。

2) 調査概要

遺構面までの深さは、地表面から約0.7mである。検出した主な遺構は第15次調査で検出された溝の続きの南北溝3(SD 704・711・712)がある。これらの溝は北で東に約8°振れている。SD 711・712は並行する鎌倉時代末期のもので、第15次調査では溝と溝の内々の幅は1.7～2.5mあり、今回の調査地での幅は2m前後である。溝の規模は前回のものと同じでS

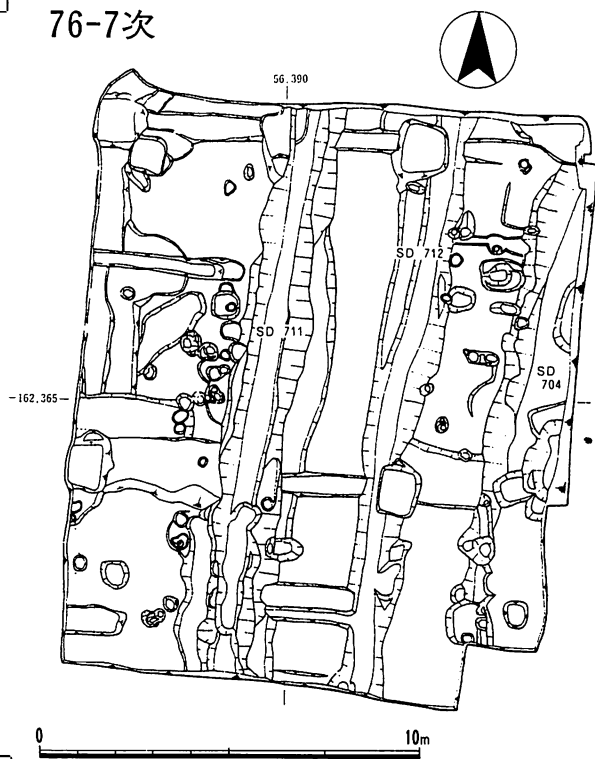


fig. 7 遺構実測図 (1:200)

D711 が幅 2.0m、深さ 0.8m、S D712 は幅 1.0m、深さ 0.4mと S D711 のほうが規模が大きい。S D704 は幅 2.0m以上、深さ 0.5mの規模で、平安時代後期のものである。第15次調査ではこの延長線上には南北溝はなく、この位置で東西溝S D704が終わっているため、東西溝S D704 が北に折れ曲がったものと考えられる。

出土した遺物は整理箱で7箱あり、特殊な遺物には緑釉陶器2、墨書土器2がある。

8. 76-8次調査 (6 A F M-B・G・H)

地 番 多気郡明和町大字齋宮字鍛冶山2736-3番地ほか
原 因 保全柵の新設
調査主体 明和町
調査担当 三重県齋宮跡調査事務所
調査期間 昭和63年8月25日～8月26日
調査面積 12m²

1) はじめに

当該現状変更は竹神社東 100mの近鉄宇治山田線沿い北側の保全柵(延長70m)新設工事である。工事中、東側で遺構面が検出されたので工事を中断し、遺構面の検出された40mについて幅0.3mのトレンチ調査を実施した。

2) 調査概要

遺構面までの深さは現地表から約0.5mで、検出した主な遺構には平安時代前期の土壇1があるだけである。土壇S K 5503は東西3.0m、幅が狭いため深さ0.2m(地表から約0.7m)下げただけで完掘はしていない。平安時代前II期の遺物を少量出土しただけである。

出土した遺物はすべてを合わせて1箱しかなかった。

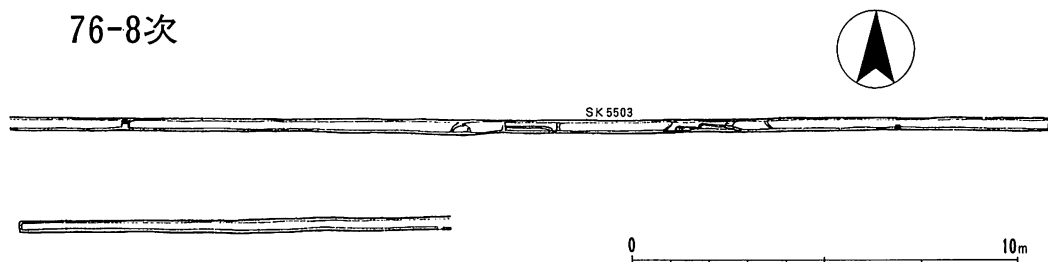


fig. 8 遺構実測図 (1:200)

9. 第76-9次調査 (6 A C Q)

地 番 多気郡明和町大字竹川字南裏144-1番地

原 因 住宅新築

調査主体 明和町

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和63年9月26日~9月30日

調査面積 175m²

1) はじめに

申請地は史跡西南部に位置し、厳密には史跡に接する露越遺跡の範囲に入っている。現状は畑地である。

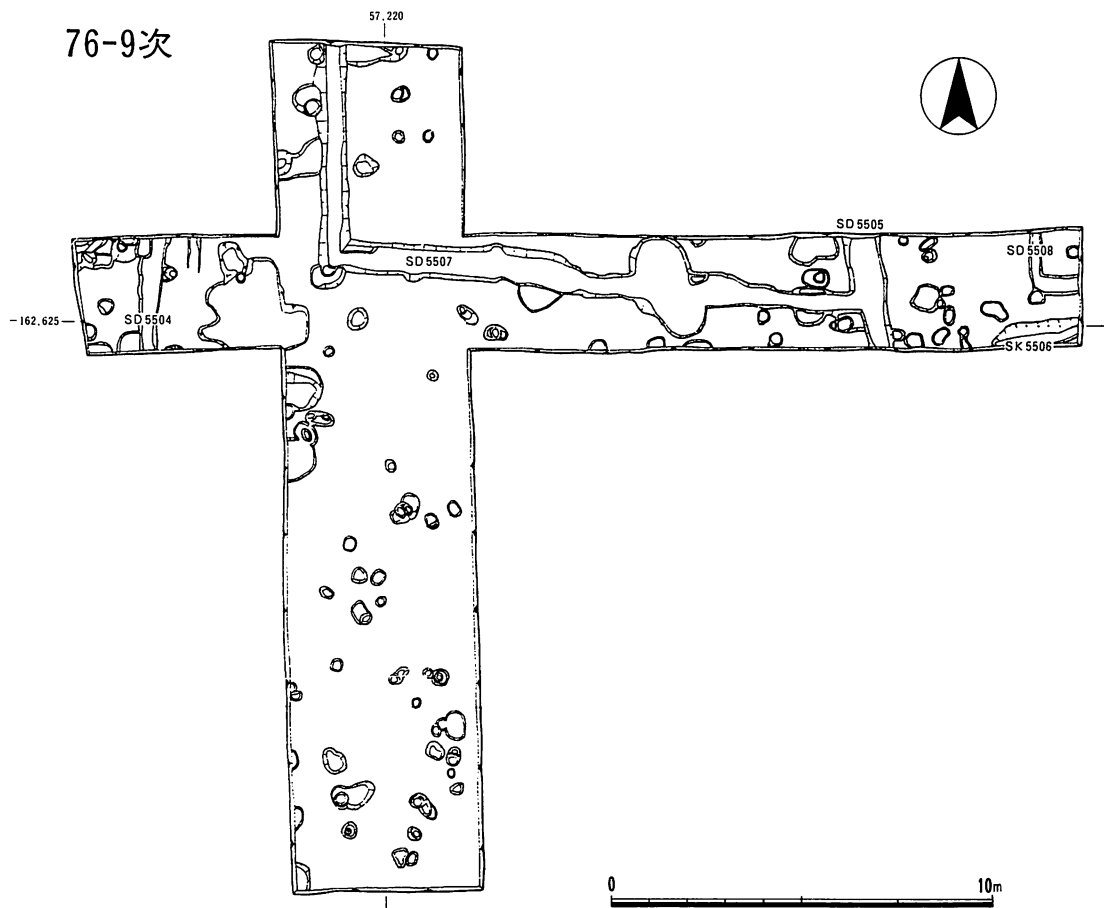


fig. 9 遺構実測図 (1 : 200)

2) 調査概要

表土から 0.4m で遺構検出面に達する。基本的層序は第1層：暗灰褐色、第2層：黒褐色、第3層：黄褐色（地山）である。

大小の攪乱土壇が目立ち、これと言った遺物もない。

発掘区西端の南北溝 S D 5504からは、細片ながら13世紀代の土師器鍋が出土している。また、東端にある南北溝 S D 5505及び土壇 S K 5506はいずれも平安時代末期ごろのものである。溝 S D 5507・5508からの遺物はなく、時期は不明である。その他、包含層や攪乱土壇をはじめ、数箇所ピットからは16世紀末～17世紀初頭の土師器鍋や陶器類の出土がめだつた。

特にまとまりのある建物は確認していないが、S D 5504の西にあるピットなどは、掘立柱建物の一部を構成する柱穴になるかも知れない。

10. 第76－10次調査（6 A B D－U）

地 番 多気郡明和町大字竹川字古里579番地

原 因 盛土

調査主体 明和町

調査担当 三重県齋宮跡調査事務所

調査期間 昭和63年11月16日～12月2日

調査面積 448m²

1) はじめに

申請地は史跡西部の古里地区の北部に位置し、これまで今回の調査区の西では第39次調査が実施されている。第39次調査では、齋宮成立以前の弥生時代及び古墳時代の遺構が検出されたほか、奈良時代と鎌倉時代の各種遺構が検出されている。台地西端部に共通する傾向として、平安時代の遺構は少ない地域である。

2) 調査概要

今回の調査は、南北28m、東西16mの調査区を設定し、448 m²について調査を実施した。遺構面までの深さは、0.6～0.7mである。

検出した遺構には、奈良時代の竪穴住居1・掘立柱建物2、鎌倉時代の掘立柱建物1・土壇4・溝6がある。

奈良時代の竪穴住居 S B 5510は、3.2m×2.4mの規模で、北東部の中央にカマドを持つ。深さは0.05m程で残りはよくない。床面には張り床をした粘土の痕跡が一部に残っていた。

掘立柱建物S B2245は、調査区西端で検出したもので、柱間は1.4mである。第39次調査でも検出されており、3間×3間の総柱建物になると思われる。S B5520も発掘区西に続く3間×3間の総柱建物と考えられる。柱間は南北が1.5m、東西1.35mである。

鎌倉時代の掘立柱建物S B5515は、3間×3間の総柱建物で人頭大の河原石を根石としている。柱間は南北2.0m、東西1.8mである。土壇は、S K5509が深さ0.3mで、他はいずれも0.1m前後と浅いものである。いずれも土師器皿等が出土している。その他S D5513・5514・5517・5521・5522はいずれも鎌倉時代の溝で、土師器皿、山茶碗等が出土している。井戸S E5519は、完掘はしていないが、山茶碗等が出土し、鎌倉時代のものである。

調査で出土した遺物は少なく、特殊な遺物には墨書土器3、石鏃1が出土している。

11. 第76－11次調査（6 A B E）

地番	多気郡明和町大字竹川字古里554番地ほか
原因	古里地区整備 ふれあい広場
調査主体	明和町
調査担当	明和町斎宮跡保存対策室
調査期間	昭和63年11月15日～12月19日
調査面積	925㎡

1) はじめに

申請地は史跡西部の古里地区に位置し、2ヶ所調査区を設定し調査を実施した。北調査区（遺構実測図は fig. 3）は東西30m、南北13m（面積400㎡）で、第76－3次調査の中央南に接する位置にある。南調査区は北調査区の約30m南の位置で、東西21m、南北25m（面積525㎡）の調査区を設定した。

2) 調査概要

検出した主な遺構は北調査区では、弥生時代の方形周溝S X5525、奈良時代の掘立柱建物S B5530、竪穴住居S B5531の他、鎌倉時代の井戸S E5526、溝S D5527・5529・5532がある。

弥生時代の方形周溝S X5525の周溝の東北隅から弥生時代後期の壺がまとまって出土した。奈良時代の掘立柱建物S B5530は3間×3間の総柱建物である。柱掘形は径0.7～0.9mと比較的大きなものである。また竪穴住居S B5531は東西3.0m、南北2.8mで北壁中央にはカマドを伴う。カマド部分には後世の南北溝が走っており、残存状況はあまりよくない。井戸S E5526は径2.0mのもので、深さは約2mまで下げたが完掘はしていない。上面では人頭大の河原石



fig.10 遺構実測図 (1 : 200)

が三段積み上げられている。出土した遺物は少ない。

南調査区では飛鳥時代の竪穴住居 3 (S B 5540・5544・5545)、奈良時代の竪穴住居 1 (S B 5533)・土壇 3 (S K 5534・5542・5543)、鎌倉時代の井戸 S E 5538・土壇 S K 5537のほか溝 S D 5535・5541がある。

飛鳥時代の竪穴住居 S B 5544・5545は調査区中央南にあり、奈良時代の土壇 S K 5543と重複する。S B 5545は東西 5.1m、南北 5.2m、S B 5544は東西 3.0m、南北 2.6mと小型である。重複関係から S B 5544のほうが新しい。

12. 第76-12次調査 (6 A E E)

地 番 多気郡明和町大字齋宮字楽殿地内
原 因 町道下水管新設
調査主体 明和町
調査担当 明和町齋宮跡保存対策室
調査期間 平成元年 2月22日～2月27日
調査面積 24m²

1) はじめに

申請地は史跡中央部の楽殿地区でも北よりにある。当該現状変更は、現在使用されている東西道路に下水管を埋設するためのものである。そのため幅 0.6m、長さ40mで重機を使用し調査に入った。

2) 調査概要

検出した遺構には、柱穴、土壇などがあるが、遺物がほとんど出土しなかったことや、調査区の幅が狭いため性格は不明である。

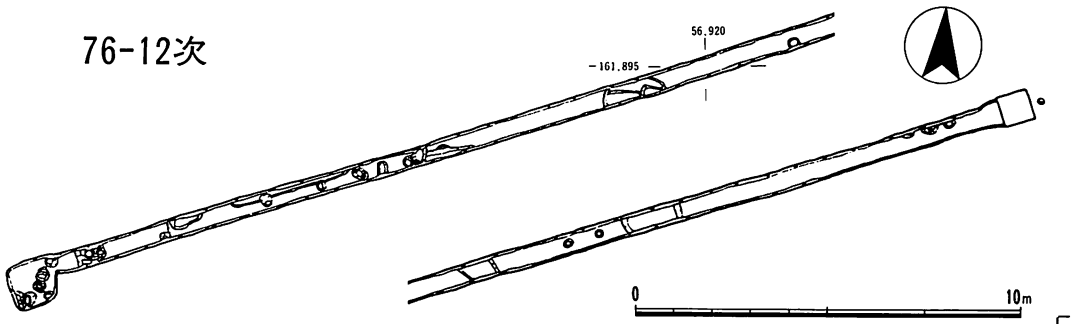


fig. 11 遺構実測図 (1 : 200)

13. 第76-13次調査 (6 A D D - K)

地 番 多気郡明和町大字齋宮字篠林3143番地
原 因 プレハブの新設
調査主体 明和町
調査担当 三重県齋宮跡調査事務所
調査期間 昭和63年11月28日～12月21日
調査面積 246m²

1) はじめに

申請地は史跡中央部の篠林地区の中央西部に位置し、これまで当地域周辺では幾度かの調査が実施されている。昭和55年度に第33次調査、昭和61年度に第64-3次調査・第64-12次調査、昭和62年度に第70-1次調査、昭和63年度に第76-2次調査などが実施されている。これらの調査で検出された遺構には、奈良時代と平安時代の遺構が主に検出されている。また、篠林地区の西北部の第64-3次調査では、奈良時代の総柱建物3棟が検出されている。このように当地域周辺には奈良時代を中心とする遺構が広がっていることが判明している。

2) 調査概要

今回の調査は、対象地区の中央宅地部分を避け、北に4m×17m、南に10.5m×17mの調査区を設定した。遺構面までの深さは0.5mである。検出した遺構には、奈良時代の掘立柱建物5・竪穴住居2・土坑7、平安時代前期の土坑2、時期の不明な掘立柱建物1がある。

奈良時代の掘立柱建物は北側調査区の西部に集中する。S B 5570は総柱建物で東西2間、南北1間検出しており東北に延びる3間×3間の建物と思われる。東西の柱間は1.4m、南北は1.6mである。このS B 5570と重複する位置でS B 5569・5568を検出した。S B 5569は東西1間分を検出しただけで規模は不明であるが、柱間がS B 5570とほぼ同じため総柱建物と考えられる。S B 5568は東西1間、南北1間を検出しただけである。建物の重複関係はS B 5570→5569、S B 5568→5569で、建物の柱掘形から出土した遺物は少ないが奈良時代前期のものと考えられる。同じ調査区にはS A 5567がある。柱間が異なるため南から二つめで東南に折れ曲がり建物になる可能性もある。奈良時代前期の土坑S K 5566より古く、ほぼ同時期と思われる。

南の調査区では掘立柱建物S B 5574・5577があり、S B 5574は奈良時代、S B 5577は出土した遺物がほとんどないため時期は不明である。

竪穴住居S B 5573・5575は南の調査区で検出した。いずれもカマドを南壁に造り、煙道部が残るものである。S B 5575の煙道部には土師器甕が使用されている。出土した遺物は少ないが、

いずれも奈良時代前期と考えられる。

土壇S K 5566・5571・5572・5578・5580・5581は奈良時代前期の範疇に入るものと思われる。このうちS K 5571は竪穴住居の可能性もある。また、S K 5576・5579は平安時代前期の遺物を少量出土している。

今回の調査で検出された遺構は奈良時代前期を中心としたもので、特に掘立柱建物は4棟検出されている。このような奈良時代の建物は当篠林地区中央から西で、隣の塚山地区では東部（第31-5次調査、第64-12次調査、第65-1次調査）で多く検出されており、この塚山地区東部から篠林地区中央にかけての地域は、奈良時代になんらかの施設があったと想定され、今後奈良時代の斎宮を考える上で重要な地域と考えられる。

76-13次

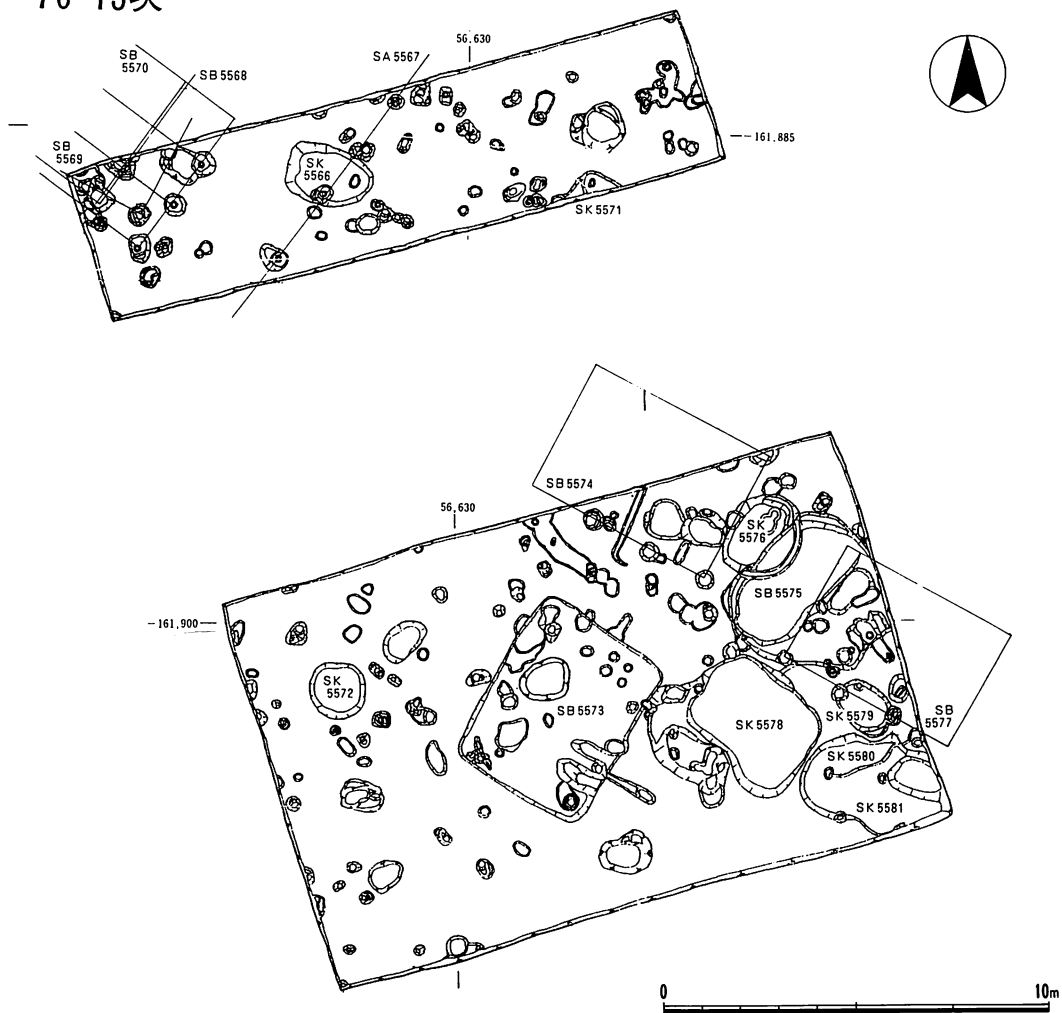


fig. 12 遺構実測図 (1 : 200)

14. 第76-14次調査 (6 A E E - S)

地 番 多気郡明和町大字齋宮字楽殿2878-3番地
原 因 個人住宅の新築
調査主体 明和町
調査担当 三重県齋宮跡調査事務所
調査期間 平成元年1月18日～1月31日
調査面積 72m²

1) はじめに

申請地は、史跡中央部北側、楽殿地区の北よりに位置する。昭和62年度の第70-2次調査、今年度には第76-5次調査が道路を挟んだ南の所で、また、南30mの位置で第70-7次調査が実施されており、奈良時代を中心とした遺構が検出されている。調査区は東西12m、南北12mを最初に設定したが、遺構面まで深いことが判明したため南北の長さを6mにして調査を実施した。

76-14次

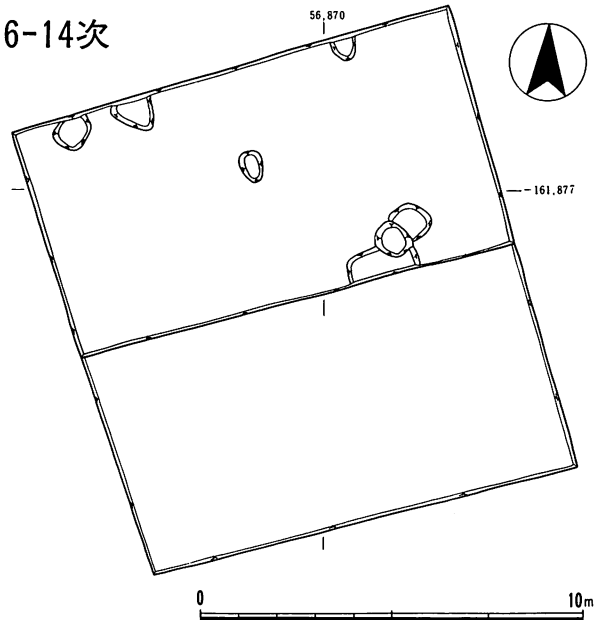


fig. 13 遺構実測図 (1:200)

2) 調査概要

遺構面までの深さは0.7mであり、上から耕作土が0.2m、置き土が0.2mでその下に旧表土の順である。検出された遺構は攪乱のみであり、奈良時代から平安時代まで遡る遺構は検出されなかった。

15. 第76-16次調査 (6 A E K - B・C)

地 番 多気郡明和町大字齋宮字楽殿2936-2番地
原 因 史跡公園内便益施設の設置

調査主体 明和町
調査担当 三重県齋宮跡調査事務所
調査期間 平成元年 2 月22日～2 月23日
調査面積 37m²

1) はじめに

申請地は齋王の森の南東約20mの所に位置している。かつて昭和57年度に実施した第42次調査の南側に隣接する。

2) 調査概要

第42次調査ではその南端で東西溝（区画溝）S D 2625が検出され、土取りの跡も相当に確認された所である。現在は史跡公園として整備されている。（年報1982）

今回はその南側であったが、後世の土取りによって、本来はあったと思われる遺構はすでに消失していた。検出面までの深さは0.3～0.35m、湧水著しく、北及び東壁に排水溝を切って対処した。埋土は暗茶褐色ですべて客土であると思われる。

出土した遺物は整理箱で1箱と少なく、特殊な遺物には緑釉陶器が1点ある。

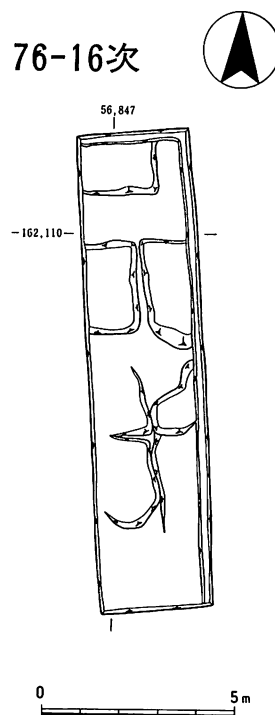


fig. 14 遺構実測図（1：200）

16. 第76-17次調査（6 A E V - A）

地番 多気郡明和町大字齋宮字鈴池339-5番地
原因 個人住宅の増築
調査主体 明和町
調査担当 三重県齋宮跡調査事務所
調査期間 平成元年 3 月13日～3 月20日
調査面積 38m²

1) はじめに

申請地は史跡中央南の鈴池地区に位置し、昭和54年度に実施した第25-10次調査（年報1979）

の南5mのところを東西12.5m、南北3mのトレンチを設定し、38㎡の調査を実施した。

2) 調査概要

検出した遺構には掘立柱建物1、南北溝2がある。

第25-10次調査では南北溝SD1597と掘立柱建物SB1599が検出されており、今回の調査ではこの続きを検出した。また、SD1597の東側にも南北溝SD5582が走ることが確認され、両溝の間を道路と考えると、道路幅は約3mである。

掘立柱建物SB1599の桁行はこれで3間分を確認したことになるが、今回の調査では妻柱は検出されなかったため、柱通りは更に南に延びて4間ないし5間はあろうと推定される。梁行は2間であることが判明したので、SB1599は南北棟である。柱間は2.4m前後である。

柱掘形は径0.7m×0.9m、深さ0.6mで、掘形内埋土上層から0.15m～0.2m大の河原石が数個検出されたのは、第77次調査（昭和63年度、東加座地区）で検出された平安時代前I期のSB5522と極似する。

上記2条の溝はこのSB1599を切る形で検出された。幅1.0m～1.8m、深さ約0.5mである。SD1597よりSD5582の方が若干深い。出土遺物が少ないので断定しかねるが、平安時代後期に位置づけておく。

調査で出土した遺物は整理箱で1箱しかないが、特殊な遺物として緑釉陶器が4点ある。

ここは現在の史跡範囲の南端にあたっており、又、昨年第70-3次調査でも奈良時代末期～平安時代前期の大型建物が2棟検出されているところから史跡南端の牛葉、木葉山、鈴池地区は更に重要視されるべき地域であろう。齋宮寮の遺跡は更に南方へ拡大して考える必要性も将来的には予想すべきである。

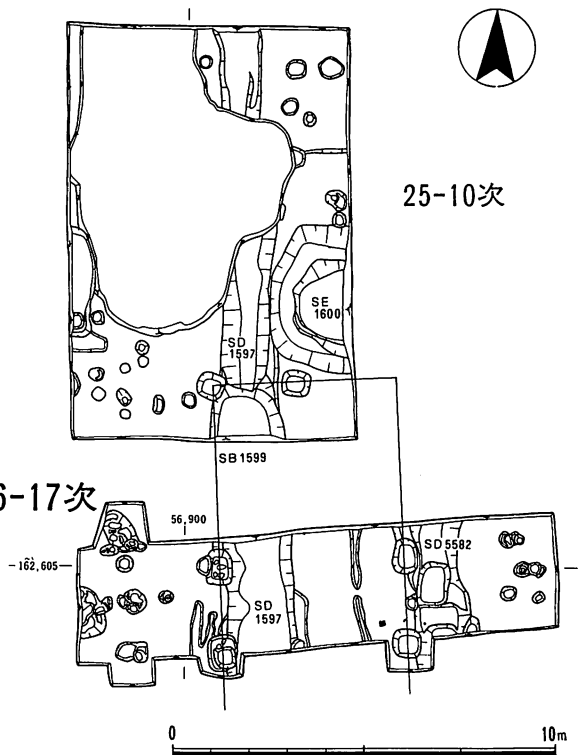


fig. 15 遺構実測図 (1:200)

圖 版

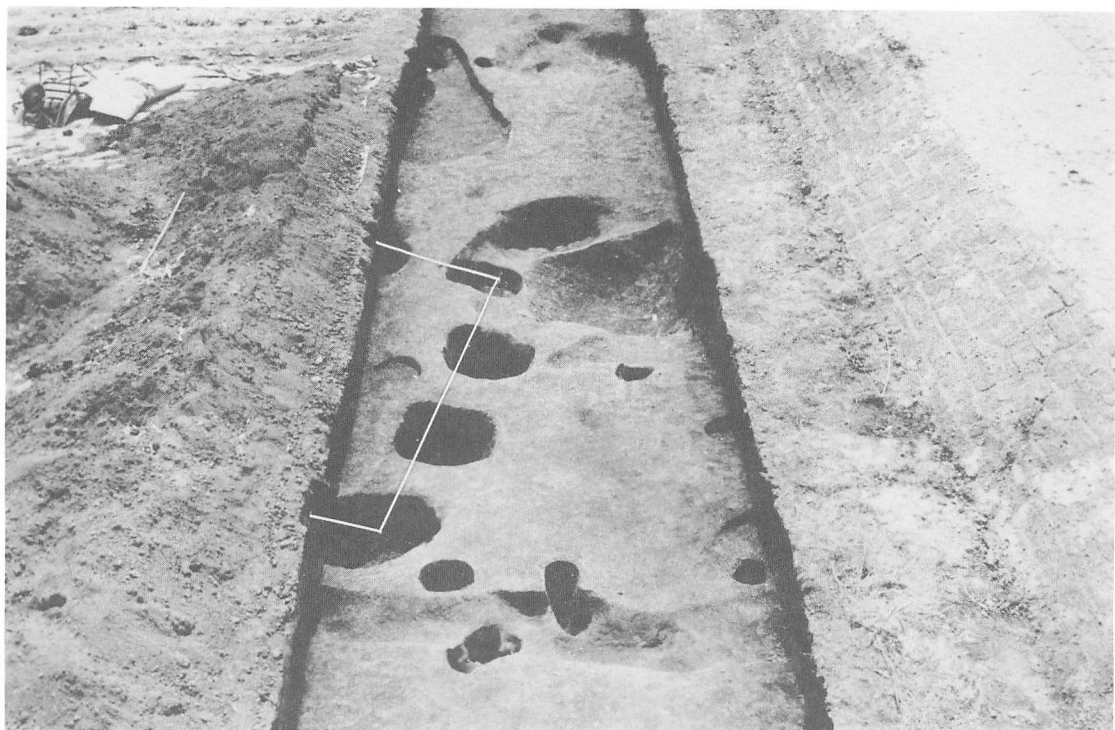


第76-2次調査 東部景 (北から)



第76-2次調査 西部景 (北から)

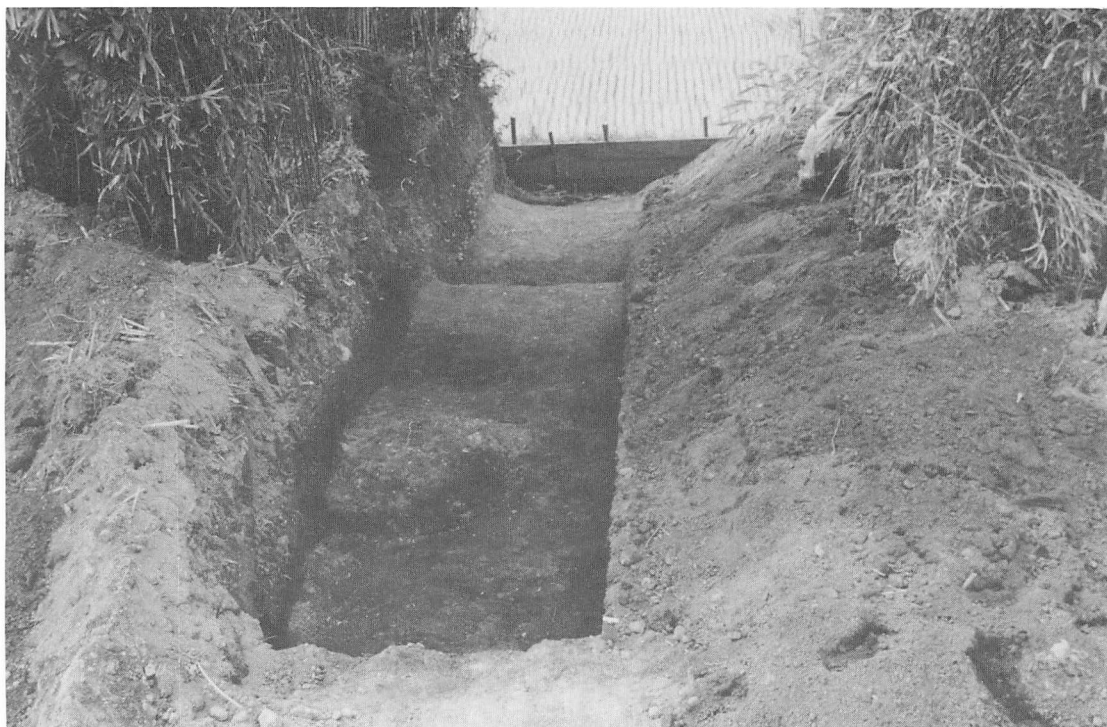
PL 2



第76-3次調査 第1トレンチSB5468 (西から)



第76-3次調査 第1トレンチSB5472 (西から)



第76-3次調査 第2トレンチ (東から)

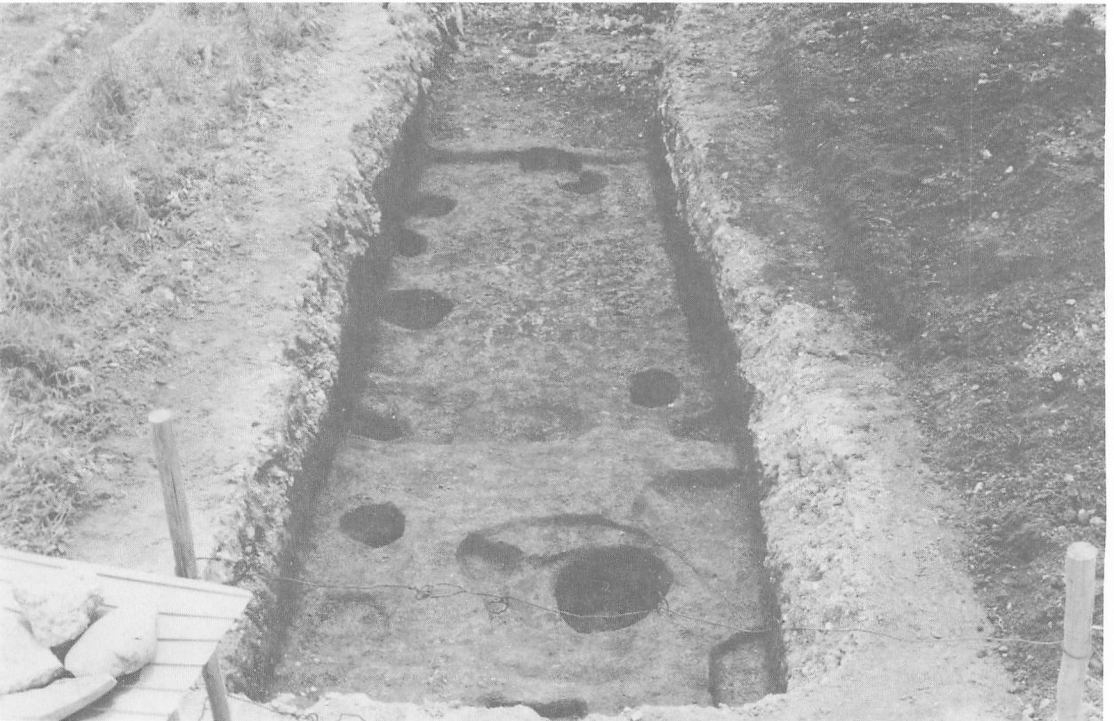


第76-3次調査 第3トレンチ (東から)

PL4



第76-4次調査 (東から)



第76-5次調査 SB5492 (東から)



第76-6次調査（東から）

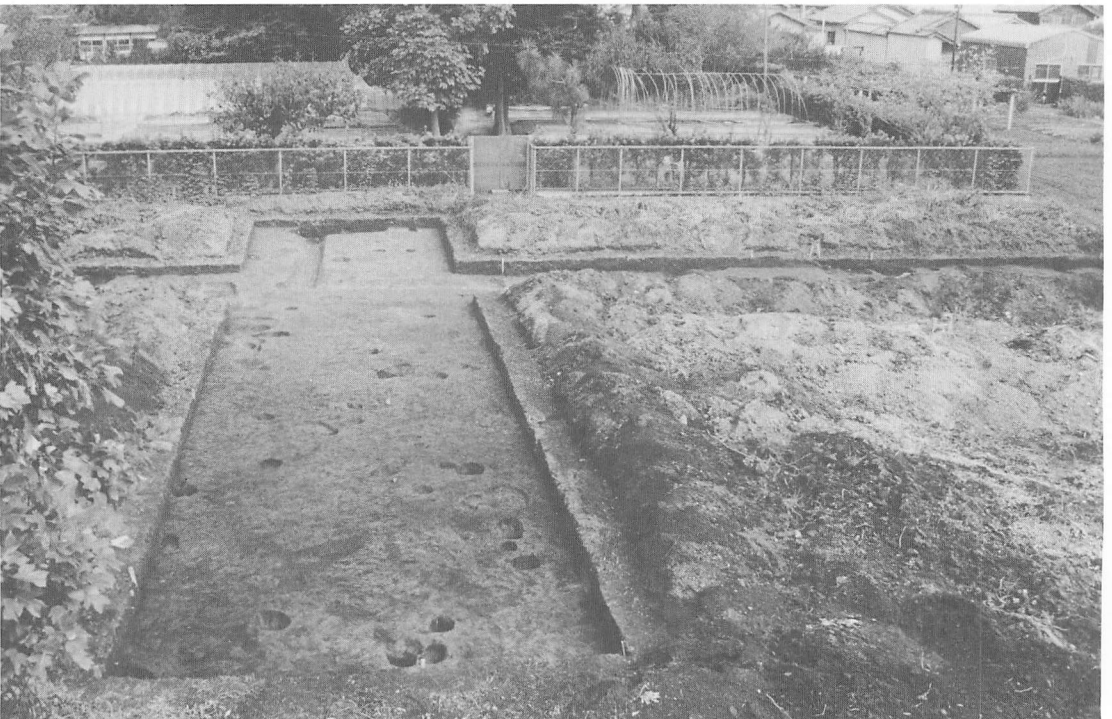


第76-7次調査（北から）

PL 6



第76-8次調査 (東から)



第76-9次調査 (南から)

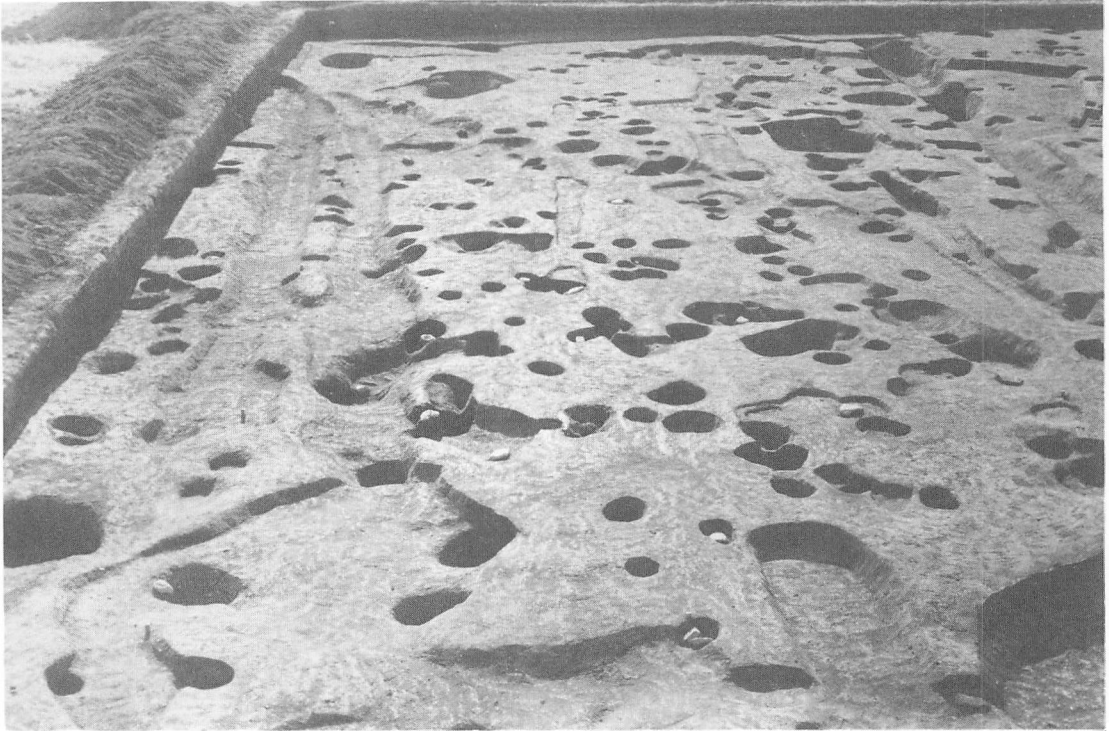


第76-10次調査 (南から)

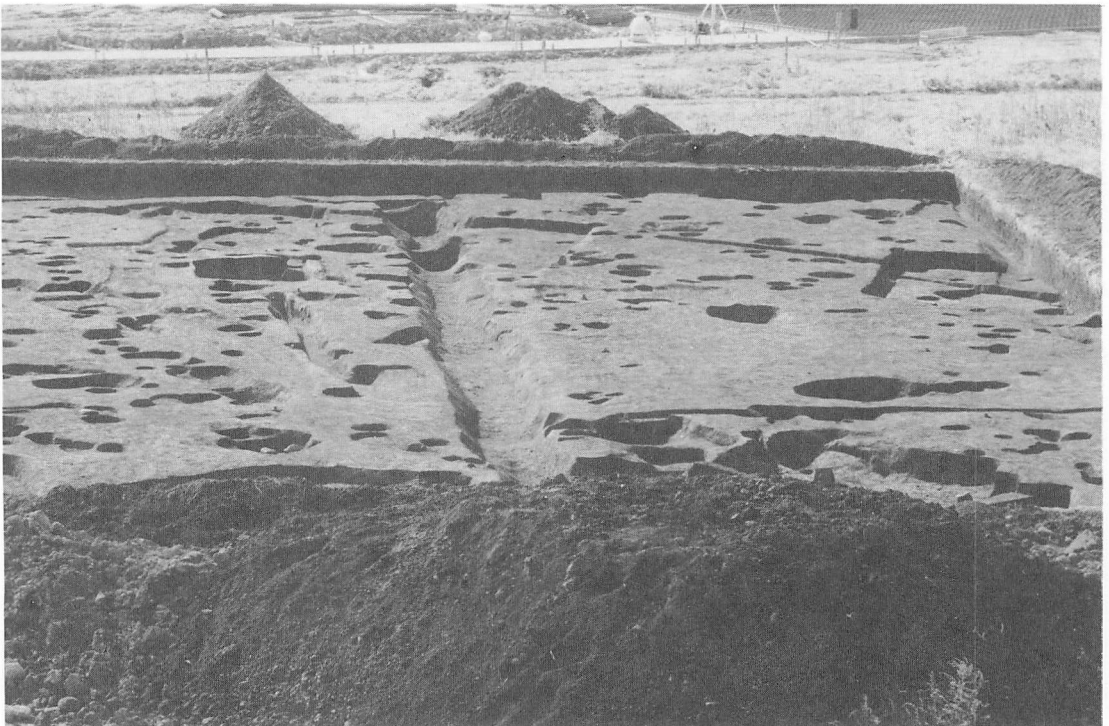


第76-10次調査 S B5520 (東北から)

PL 8



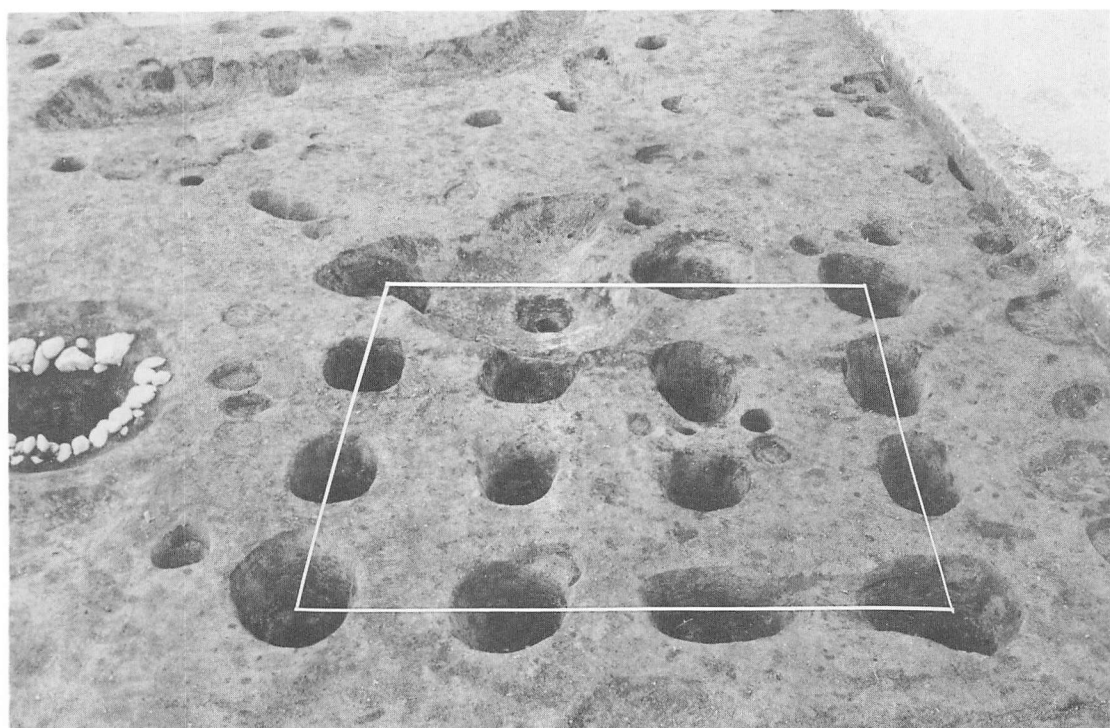
第76-11次調査 南調査区 (北から)



第76-11次調査 南調査区 (北から)

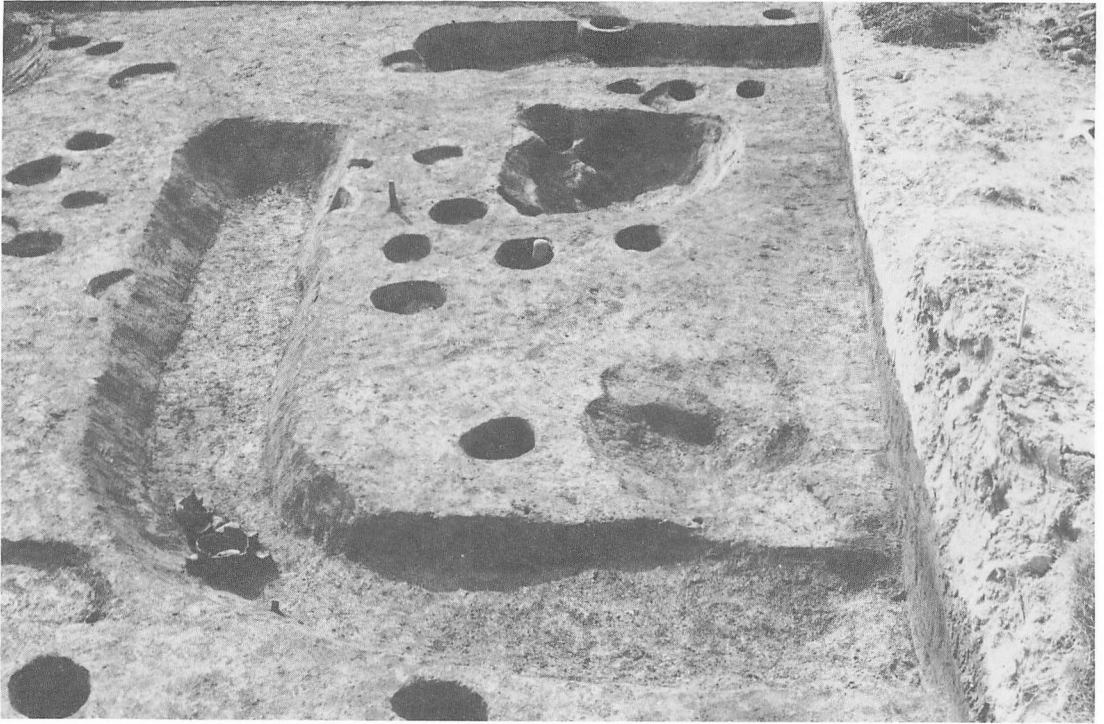


第76-11次調査 北調査区 (西から)

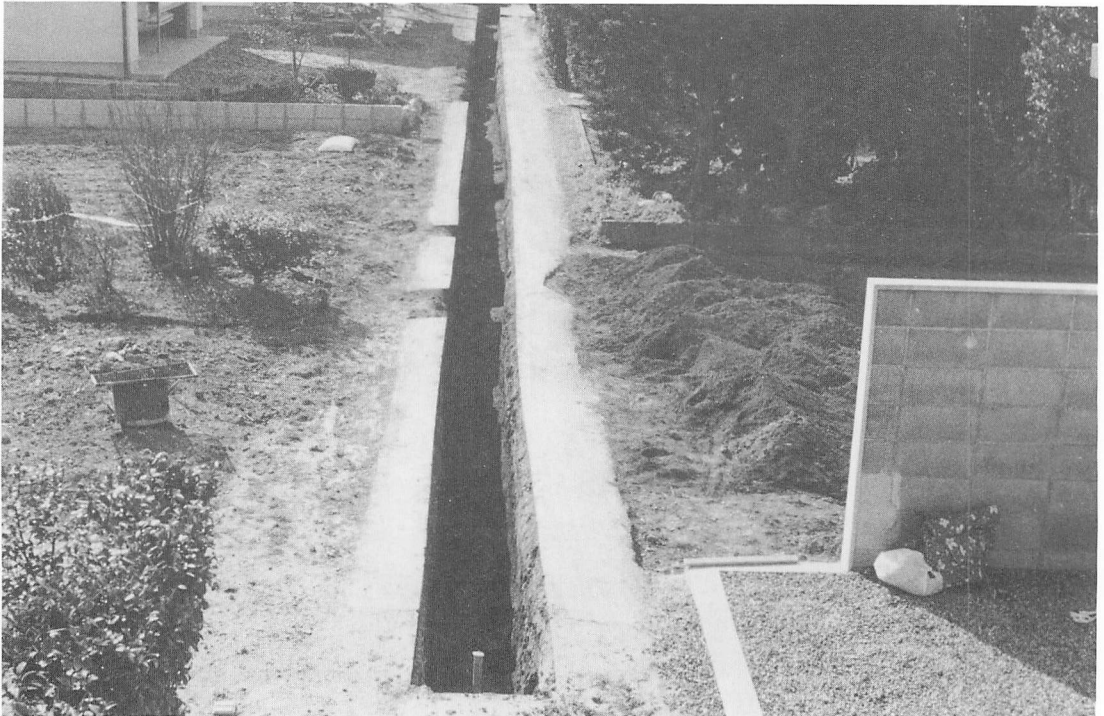


第76-11次調査 北調査区 S B 5530 (東から)

PL10



第76-11次調査 北調査区 S X 5525 (北から)



第76-12次調査 (東から)

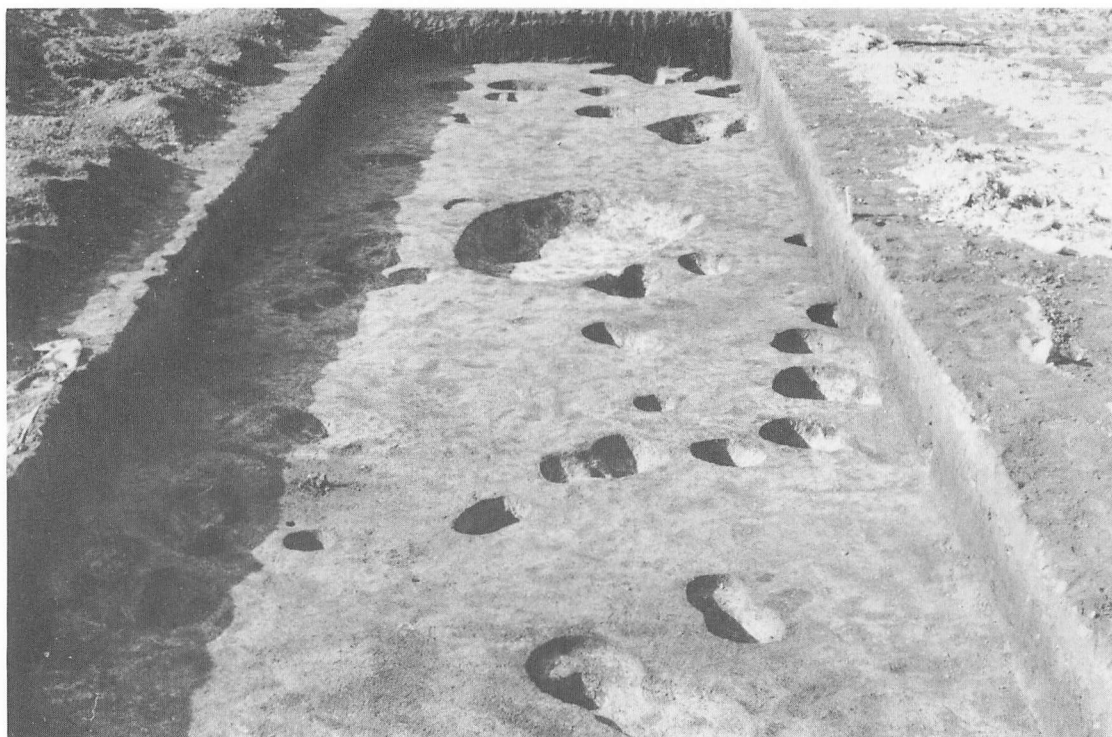


第76-13次調査 南調査区 (西から)



第76-13次調査 南調査区 S B5573 (北西から)

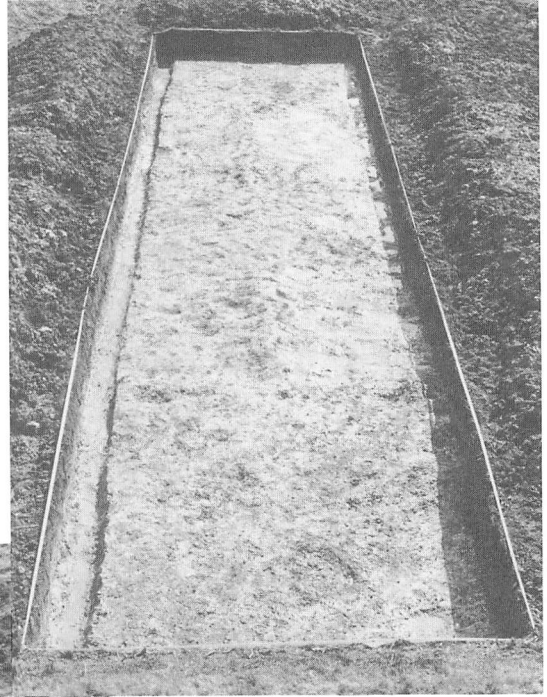
PL12



第76-13次調査 北調査区 (東から)



第76-14次調査 (西から)



第76-16次調査（北から）



第76-17次調査（西から）

史 跡 齋 宮 跡
昭和63年度現状変更緊急発掘調査報告

平成元年 3 月 31 日

編 集 三重県齋宮跡調査事務所
明 和 町

発 行 明 和 町

印 刷 光 出 版 印 刷 株 式 会 社

本書は、明和町及び三重県齋宮跡調査事務所の許可を得て、齋宮研究会が増刷したものである。

